

JLTA Newsletter No. 41

日本言語テスト学会

The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 41 発行代表者: 渡部良典 2016 年 (平成 28 年) 10 月 31 日発行
発行所: 日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1 順天堂大学さくらキャンパス
小泉利恵研究室 TEL: 0476-98-1001 (代表) FAX: 0476-98-1011 (代表)
e-mail: rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp URL: <http://jlta.ac>



初参加の LTRC ワークショップは「頭の体操」

根岸 雅史 (東京外国語大学)

私はこれまでも何度か LTRC に参加してきたが、今回初めてワークショップに参加してみた。大会前の 2 日間のワークショップで、私は、米国 Center for Applied Linguistics の Dorry M. Kenyon と David MacGregor による Understanding and Using Standard Setting in Language Testing: A Practical Foundation に参加した。

このワークショップに参加したのは、これまで自分自身で経験してきたスタンダード・セッティングのやり方を確認するためであった。このワークショップで取り上げられた手法は、Angoff method, Bookmark method, Body of Work method であった。これらの方法自体は、馴染みのあるものであったが、いくつかの発見もあった。

1 つは、スタンダード・セッティングの際によく用いられる *Relating language examinations to the Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment. A Manual* (2009) について、これは書き方がわかりにくいと言っていたこと (読みにくく感じていたのは私だけではないと知り、少しほっとした)。それから、スタンダード・セッティングでは、そのプロセスのどこかに、必ず主観的な要素があるということだ。この点に関して確信がなかったのだが、主観的な判断はスタンダード・セッティングの必須の側面だと理解した。主観的判断は避けられないが、きちんとした手続きを踏むことが必要だということだ。

ただ、1 番の発見は、皮肉なことに、日本のテストの多くは本当の意味ではスタンダード・セッティングが必要なのではないか、ということだ。確かに、既存のテストの CEFR のレベルへの関連づけという意味では、スタンダード・セッティングは行われるようになったかもしれない。しかし、IELTS や TOEFL において留学生の入学許可のスタンダード・セッティングが必要なのとは対照的に、日本のほとんどの大学入試では、スタンダードは必要ない。それは、日本の大学入試の合否ラインは、定員によって決められているからである。求めるスタンダードがあったとしても、それに達していなくても合格させなければならないこともあるし、達していても不合格にしなければならないこともある。しかも、合否判定は、複数の科目の合計点でなされるのが一般的であるから、それぞれの受験科目ごとにスタンダードを設定することはできない。こうした入試制度が、スタンダードという概念を普及させずに来たのかもしれないという思いに至った。日本では、検定試験のレベルなども、厳格なスタンダードというよりは、学習の指標といった方

がいいだろう。これは、航空英語のレベル 4 が英語による航空業務ができるかどうかの明確なスタンダードとなっているのとはまったく意味が異なる。

奇しくも、LTRC 最終日の 6 月 24 日の朝は、英国の国民投票の結果が出たところだった。LTRC に参加していたほとんどの英国人は「残留派」だったためか、EU を離脱するとどうなるのか様々な問題に関して朝から議論は白熱していた。これは一種の頭の体操のように思えたが、実は私のワークショップ初体験もいろいろな意味での日本の言語テストに関する頭の体操となったのかもしれない。

**日本言語テスト学会
第 6 回最優秀論文賞**

受賞者から

**Message from the Recipient of
The 6th JLTA Best Paper Award**

濱田 彰（日本大学）

JLTA Journal Vol. 18 (2015) に掲載された拙著“Linguistic Variables Determining the Difficulty of Eiken Reading Passages”に対し、日本言語テスト学会第 6 回最優秀論文賞という評価をいただき、大変感激しております。本研究の実施・審査にあたっては、筑波大学の卯城祐司先生をはじめ、学会誌編集委員や査読の先生方、また多くの方々に大変貴重なご助言をいただきました。あらためて感謝申し上げます。

この論文は、英文テキストの様々な特徴を心理言語学的に解析できる Coh-Metrix を使って英検長文テキストの読解難易度を予測したものです。査読者からはデータの分析方法や解釈に対して厳しいコメントをいただきながらも、修正を重ねた結果、採択という評価をいただきました。

本研究では、読解テストで使用されるテキストの難易度を予測するのは、単語の難しさや構文の複雑さといった表層的な側面であることが分かりました。これらはテストを難しくする上で操作しやすいということも理由の 1 つとして考えられるかもしれませんが。一方、文間のつながりを理解したり文章全体を一貫して理解したりするためのマーカー（談話標識の有無など）は難しさを予測する要因とはなりません。文間のつながりを理解できたかどうかは設問で問われることが多いのも原因の 1 つだと思われます。しかし「難しい文章＝単語や文法が難しいだけ」とならないよう、テスト作成の際には工夫が必要だと感じました。

テキスト理解は、様々な言語知識・技能が関わる複雑な認知活動です。1 つひとつの単語を文法知識に基づいて処理したり、文間のつながりを接続詞や推論を通して理解したりといったことが行われます。より難しい受験級にチャレンジする学習者が「単語だけ覚えればいいや」というような学習スタイルにならないよう、読解力の測定には様々なアプローチが取られる必要があると思います。

じつは、本論文は別の学会誌で不採択となったものを、修正を重ねて再投稿したものです。*JLTA Journal* に再投稿する前、A4 で 18 頁に及ぶ指摘をいただいたとき、すぐには修正に取り掛かれませんでした。コメントを 1 つひとつ消化していきましたが、再投稿後の結果も、はじめは評価が分かれるものでした。しかし、指摘に対して修正を続けていく内に、論文の内容は当初のものより見違えるほど良くなりました。

パフォーマンスの質が目に見えて向上する、結果として良い評価が返ってくるというのは大変嬉しいものです。個人差はありますが、英語学習も似たようなものではないでしょうか。*JLTA Journal* に投稿するにあたり、言語テスト論を学びなおしました。研究と学習は異なる部分も多いですが、成果が見える、喜びにつながる、そのために指導（学習）と評価が一体となる、そのような英語教育を目指していきたいと思います。

**海外の学会・研究会
参加報告
World Conference Reports**

The 14th Asia TEFL International Conference

報告者 古賀功（東海大学）

大会名：The 14th Asia TEFL International Conference and 11th FEELTA International Conference

開催日：2016 年 6 月 30 日～7 月 2 日

開催地：The Far Eastern Federal University, Vladivostok, Russia

ウラジオストクは、日本から非常に近く、成田空港からは 3 時間以内で行けてしまう距離にあり、また時差も 1 時間しかないのも、大変便利なおところがあります。出発前に同僚のロシア語の先生からは、「ウラジオストクは英語も通じるようになってきたと思いますよ」と言われ、いざ空港に到着しましたら、驚くほど英語が通じませんでした。これは市内に入っても同様で、タクシー、レストラン、お店など大半の場所で、authentic tasks に基づいた negotiation of meaning が繰り広げられました。ただ非常に新鮮で、興味深い経験を得ることができました。

今回初めて海外学会でのワークショップ発表をできました。テーマは、Hybrid PPP という、日本の EFL 環境に適した授業実践の紹介とその理論的背景の提案でした。共同発表の笠原究先生の独特かつ楽しい授業実践で、非常に和気あいあいとした雰囲気の中で発表することができました。今回の学会でもう一つワークショップに参加する機会がありました。地元ロシアの先生が発表され、“Ten ways to retell the text”を紹介していました。現在スピーキングの授業を担当していますので、学生に興味を持って他の学生と interaction をしてもらえよう、

実際の授業で retelling 活動を使用していこうと思いました。参考までに 3 つの興味深い方法、1: role retelling（登場するキャラクターの観点から物語を再生産する）、2: Drama retelling（実際にドラマを通して再生産する）、3: Retelling an unfinished story（物語を listening として聞かせ、物語を完成させる）を紹介します（Vlasova, Dyuzheva, & Jansen-Akulicheva, 2016）。

本学会のテーマでもあり、21 世紀の言語教育を考えることをテーマとした招待発表が多々ありました。ヴェトナム、中国、韓国などの国で、どのように伝統的なものから 21 世紀の授業または、21 世紀の教員に変化しているかを説明し、様々な議論が展開されていました。個人発表も、研究的要素が強い発表、より実践に目を向けた発表、など幅広い分野で、数多くの先生方が発表されていました。私は学習者の個人内要因をテーマに研究していますので、それに関する発表をたくさん聞いたのは非常に勉強になりました。また、テストング、CEFR、コーパス関連の発表も幾つか聞くことができました。

海外学会に参加すると研究以外のことを学ぶことができます。今回再認識させられたのは、プレゼンテーション能力の必要性です。私が感銘を受けた先生は、もちろんパワーポイントを使用し、さらに音声や映像も踏まえ、非常にわかりやすい発表をされていました。しかし、最も印象的だったのは、聴衆の注意・注目を引き付ける話し方・話術でした。恐らく経験や研究を積み重ねて、高いプレゼンテーション能力を獲得されたと思いますので、私も自身の研究だけでなく、様々な能力を習得しなければならないと実感しました。以上、私の「海外学会参加見聞録」でした。

The 38th Language Testing Research Colloquium

報告者 岡部康子
(CEES 一般財団法人進学基準研究機構)

大会名 : The 38th Language Testing Research Colloquium (LTRC)
開催日 : 2016 年 6 月 20 日～ 24 日
開催地 : Palermo, Sicily, Italy

2016 年 6 月に第 38 回 Language Testing Research Colloquium (LTRC) がイタリアのシチリア島パレルモにて開催され、そこでポスター発表を行ってきた。私がこの学会に参加するのは、2015 年の 3 月にカナダ (トロント) で開催された第 37 回に続いて 2 度目であった。世界的に著名な研究者の方が多く集まり、ひたすらテストに関することが議論されるこの大会の雰囲気初めて触れたときの感動と興奮は忘れられない。その際、かつてイギリス留学時代に教わった Barry O'Sullivan 先生との 10 数年ぶりの再会を果たしたり、海外で活躍する日本人の研究者の先生に多くお会いできたり、大変かけがえのない経験をし、次回は必ずこの場で発表したいと思った。

仕事の関係で、Pre-Conference Workshopsには参加できず、学会本体のみの 3 日間の参加となった。6 月 20 日夜、Palermo 空港に降り立った。さわやかな青い空とカラッとした天気を想像していたが、滞在中何度か突然の雨に見舞われ、思いのほか湿度が高い気候であったことが印象に残っている。

このたびのポスター発表は、ベネッセコーポレーション鹿島田優子氏と Second Language Testing Inc.社 (当時の所属) の Katherine Pulupa 氏と共同で行った。ベネッセコーポレーションは、日本の大学入試 4 技能化、および外部試験の積極的導入の流れを受けて、GTEC CBT という大学入試試験を 2014 年度にリリースしている。運営・実施はベネッセコーポレーションと一般財団法人進学基準研究機構 (CEES) との共催で行っている。今後、大学入試の代替になりうる位置づけのテストとして、ジェネラルな状況設定とアカデミックな世界の

導入部分 (一般教養レベルまで) の状況設定を織り交ぜた出題で、大学で問われる英語力を測る出題になっている。また、問題設計の段階から、CEFR の CAN-DO リストに基づいた形式を取り入れている点で特徴的である。今回のポスターのテーマは、"Test Development at the Intersection of Context, Construct, and Content"ということで、上記の特徴を踏まえた問題制作の過程を紹介した。

発表当日、時間になると多くの方が訪れてくださり、3 人でそれぞれ手分けしてポスターの内容を説明した。テスト時間はどのくらいか？ 他テストとの差別化は？といった質問から、今回は Listening, Reading に絞った発表ではあったが、Speaking, Writing の採点基準についても質問をいただいた。

今回の大会のテーマは、"Language Constructs, Contexts, and Content in Classroom and Large-Scale Assessments"であった。英国ベッドフォードシャー大学の Fumiyo Nakatsuhara 氏、Chihiro Inoue 氏、および Linda Taylor 氏がスピーキングテストの採点方法について「ライブ」、「音声」、「ビデオ」での採点の比較研究をしていた。それぞれの手法によって高く／低く評価される観点があるという結果であった。また、それぞれの手法についての採点官のコメントも共有された。現在 GTEC CBT では音声のみの採点を行っているが、今後、科学技術の進歩に伴い 1 つの方法に固執するのではなく、目的に応じた採点方式の導入や、それぞれの採点方式の特徴を把握し、より妥当性のある採点を実現化する必要があると感じた。

昼食はケータリングの料理が支給されたが、学会中の昼食時にワインが提供され、さすがイタリアだと感心した。

海外の研究の動向

Report on Research in the World

オーストラリアのテスト・評価の動向：

Association for Language Testing and Assessment of Australia and New Zealand (ALTAANZ)

報告者 秋山朝康（文教大学）

昨年 ALTAANZ の学会（2015 年 11 月 30 日～12 月 2 日）で参加・発表してみてオーストラリアのテスト・評価の研究動向を簡単に述べる。

サバティカルでメルボルン大に行く 2 ヶ月前、1 月 25 日にメーリングリストでこの学会を知った。

Dear language testers,

A chance to visit us Down Under - ALTAANZ has a dedicated strand through this conference - in November, but the call for papers closes at the end of February. Early December (early summer) in Adelaide should be lovely...

Best wishes

Tim (McNamara)

師匠が「12 月上旬（初夏）のアデレードは Lovely」と書いている。発表が終わって海沿いのレストランで美味しいワインでも飲んでゆっくりしている自分を想像した。楽しいはずでなければならないサバティカルをニコニコしながら早速この学会へ応募した。この頃までに想像は妄想に膨らんでいた。

この学会だけで最近の豪州の動向を述べるのはちょっと無謀であるが、豪州の学会の雰囲気はこの 3 文字である。K・F・C（気取らない・フレンドリー・現代的？）。

発表で扱っている分野は広範囲にわたり、理論と実践のバランスもとれていた。参加者は現場の先生方から大学院生と幅広かった。発表を申し込むときに abstract の審査があったが、3 人で査読しているらしく個々のコメントが書いてあった。これが発表するときに有益なアドバイスになった。また abstract を加筆・修正するように求められた学会はこれが初めてだった。

ALTAANZ はメルボルン大の LTRC (Language Testing Research Centre) と共同で毎年 workshop を開催している。例えば、2015 年度は 1) A practical approach to questionnaire construction for language assessment research、2) Integrating self- and peer-assessment into the language classroom、3) Collaborative writing workshop: Implementing and assessing collaborative writing activities、4) Assessing vocabulary、5) Revisiting language constructs? Recent theoretical advances and applications to practical test design, development and validation が開催された。筆者もいくつか参加したが、現場の先生と大学院生が熱心な勉強をしていた。内容も講師陣もすばらしかった。

さて、学会の後の懇親会は思い出深いものになった。メルボルン大で同期だった Aek Phakiti 先生（現シドニー大学）と十年ぶりの再会。一人で惨めに過ごさなくてもいいやとほっとするいや否や、本やジャーナルでしかお目にかかれない先生たちを一人ひとり彼が紹介し始めてくれたのである。こちらは恥ずかしいやら、緊張するやらで、いつもより多くお酒を飲んだことはいうまでもない。アデレードの初夏の風とワインは、発表を終えて緊張がほぐれた私にはベストなコンビネーションだった。まさしく Lovely であった。

この学会は日本の研究者の方にお勧めである。会員になるには無料で、年会費も不要であるらしい。日本から参加するには時差が 1 - 2 時間なので体に優しい。そして寒い日本を一時的に忘れられ

ることができる。さらに、学会の前にワークショップなど開催されているので勉強もできる。仕事を一時的に忘れて初夏の雰囲気の中、リラックスしたい方にお勧めである。

<http://www.altanz.org/submit-a-proposal1.html>

書評 Book Reviews

『教育・心理系研究のための データ分析入門』

平井明代(編) 2012 年 東京図書

本書のまえがきに書いてある通り、編著者の勤務校である筑波大学の博士課程や修士課程での授業や大学院生とのやりとりが下地になっているだけあって、まさに「痒いところに手が届く実用書・教科書」である。

第1章は、妥当性の伝統的考え方と現在の考え方、信頼性、波及効果といったテスト理論の基礎的内容をコンパクトにしかしバランスよく網羅している。第2章は、尺度や記述統計といった統計学の初歩から始まり、また SPSS を初めて使う読者のためにデータ入力方法の説明から始まっている。SPSS の操作方法についても、必要に応じて文章だけでなく SPSS 画面の画像もついている。第3章は t 検定 (t 検定で使用する効果量も含む)、第4章は一元配置分散分析 (効果量も含む)、第5章は多元配置分散分析、第6章は分散分析の応用 (共分散分析と多変量分散分析)、第7章は相関分析 (信頼性係数を含む)、第8章は回帰分析 (重回帰分析を含む)、第9章は因子分析 (主成分分析を含む)、第10章は構造方程式モデリング、第11章はメタ分析について、それぞれ理

論的解説のみならず必要に応じて SPSS の操作方法や出力結果の読み方そして論文への記載の仕方まで説明している。

効果量に関して日本語で出版された書籍はまだ少ないと思うが、本書は「SPSS 操作方法」とともに具体的にどのように算出するのかの説明もついている点は読者にとってありがたいと思う。メタ分析に関しても同様である。

事典として使うには巻末の索引がもう少し充実しているとよかった。一例を挙げると、Spearman-Brown prophecy formula を調べると「p.12」だけが記載されているのだが、p.12 を読むと簡単な一文だけの説明だけで「…第7章の相関分析で紹介します。」とあり、それを受けて第7章を読んでいくと p.147 で「…式7.3のスペアマン・ブラウン公式によって…」という箇所をやっと見つけることができるケースである。もともと入門書であって事典ではないと言われればそれまでだが、事典としても使えるほど本文の内容項目は広く網羅されかつ充実している。

「正規性」や「等分散性」や「グループ間のサンプルサイズの一致度」や「(全要因全水準の) 合計サンプルサイズ」それぞれによる分散分析 (と多重比較) における影響について説明がなされている (pp. 57-58)。また、多変量分散分析におけるサンプルサイズによる影響についても説明がなされている (p. 123)。しかし、二元配置や三元配置の分散分析における交互作用へのサンプルサイズによる影響については説明が見当たらなかった。合計サンプルサイズが30や40といった一教室分の生徒数くらいの少ないサンプル数で三元配置分散分析をおこなっている研究を英語教育研究の中で最近よく目にする。三元配置分散分析をそのような少ないサンプル数で実行し、しかもその分析結果からその研究の結論へ直接導いているリサーチ・デザインに対して、評者はそれでよいのかどうか判断できずにいる。少ないサンプル数にもかかわらずお手軽に三元配置分散分析をおこなっている研究が SPSS の発達に伴って増えている現状をみると、三元配置分散分析におけるサンプ

ル数による影響に関して個人的にはぜひとも教えて欲しい点だった。

評者は大学院修士課程の担当授業で、「テスト理論の基礎知識」と「統計学入門」と「SPSS 操作方法」それぞれの分野の書籍を複数紹介しているが、本書が上梓されたことによりまずはこの一冊が履修学生に最初にとって欲しい本となった。教科書として現在採用している。

評者 片桐一彦（専修大学）

JLTA 事務局より連絡
Messages from JLTA Secretariat

JLTA の活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

- (1) 9月17日・18日にJLTA20周年記念全国研究大会が東海大学で開催されました。全国研究大会実行委員長の藤田智子先生をはじめ、長沼君主先生、宮崎啓先生、松本佳穂子先生、古賀功先生、中川浩先生、宇佐美裕子先生には実行委員としてご尽力いただきました。改めて感謝の意を表したいと思います。

次年度の大会は、9月9日（土）・10日（日）に会津大学で開かれます。最新の情報は JLTA のホームページ（<https://jlta.ac/>）をご覧ください。

- (2) 10月8日に龍谷大学にて第43回日本語テスト学会研究例会が開かれ、活発な議論がなされました。

12月10日（土）には、第44回日本語テスト学会研究例会が、第169回JACET

東アジア英語教育研究会と合同で、西南学院大学で開催されます。どうぞ参加ください。

日時：2016年12月10日（土）

13時00分～17時30分

場所：西南学院大学東キャンパス大学院棟

テーマ：「テスト・データを用いた言語習得研究の可能性と課題」

参加費 会員および学生は無料。それ以外の方は500円

問い合わせ先 伊藤彰浩（西南学院大学）

email: LTSLA77@hotmail.com

詳細は以下へ：

https://jlta.ac/?page_id=21

- (3) 『日本語テスト学会誌』第19号と、『日本語テスト学会誌』第19号別冊（20周年記念特別号）が近々発行され、お手元に届く予定です。20周年記念特別号は、PDFでも会員に配信されます。半年後にはそのPDFが一般公開される予定です。

日本語テスト学会誌第20号は、狭義のテストングに関するものだけではなく、広く評価に関する論文を募集しています。それには教育実践やプログラム評価に関するものなど、評価全般に関わる実験・知見を含みますので、どうかふるってご応募ください。次の投稿締め切りは2017年4月30日（日）です。

- (4) 会員情報や会費納入状況の確認・修正ができる「マイページ（<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>）」はご利用いただいていますでしょうか。ログインに必要な会員番号やパスワードを紛失された方は以下からお問い合わせください（<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>）。マイページ内の会員向けページにおいて、ジャーナル・ニュースレター等の掲載があります。

所属や書類発送先など登録情報にご変更がある場合、マイページでの登録情報の変更

を3月末までをお願いいたします。

学生会員の方には、毎年学生証のコピーをご提出いただきます。またご連絡いたします。

- (5) 2015・2016 年度の会費振込について、これからの方は早急によりしくお願いいたします。2015 年度分のお支払いがない場合には、2017 年 4 月より送付物の発送がなくなり、マイページの使用もできなくなります。

- (6) 残念ながら、本会の退会を希望される方は、事務局 (jlta-post@bunken.co.jp) へのご連絡をお願いいたします。

文責：

JLTA 事務局長 小泉利恵 (順天堂大学)

JLTA 事務局次長 片桐一彦 (専修大学)

横内裕一郎 (弘前大学)

深澤真 (琉球大学)

Messages from the Secretariat

We are thankful for your support of and commitment to JLTA's activities. Please send us any comments or inquiries you may have.

- (1) The 20th Anniversary Conference of the Japan Language Testing Association was held at Tokai University on September 17 and 18. We would like to express our sincere appreciation to Tomoko FUJITA (Conference Chair), Naoyuki NAGANUMA, Kei MIYAZAKI, Kahoko MATSUMOTO, Tsutomu KOGA, Hiroshi NAKAGAWA, and Hiroko USAMI for their support.

Next year's conference will be held at Aizu University on September 9 (Saturday) and 10 (Sunday). The

latest information can be found at <https://jlta.ac/>

- (2) The 43rd JLTA Research Meeting was held at Ryukoku University on October 8, during which there was a lively discussion.

The 44th JLTA Research Meeting will be held at Seinan Gakuin University on December 10 (Saturday), jointly hosted by the 169th JACET Meeting of English Education in East Asia. Please see https://jlta.ac/?page_id=21 for details.

- (3) Two volumes—The *JLTA Journal* Vol. 19 and *JLTA Journal* Vol. 19 Supplementary: 20th Anniversary Special Issue—are being printed and will be sent in due course. The PDF version of the 20th Anniversary Special Issue will be delivered to JLTA members immediately after publication and will be made public in six months.

JLTA Journal Vol. 20 is inviting various types of contributions that include studies related to evaluation in a broader sense, such as classroom-based practice and program assessment that deal with issues and topics on testing and assessment. The next submission deadline is April 30, 2017.

- (4) Have you visited the "My Page" site (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>), where you can check and

modify your membership information and check your yearly membership fee payment status? Please contact us (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>) if you need your membership number and password, which are necessary details for the login. You can access recent *JLTA Journals*, previous newsletters, and other materials specifically for members on the “My Page” site.

If you have changes in your affiliation, address, and other information, please update your registered information on “My Page” by the end of March.

We will send student members a message asking them to submit a copy of a student certificate.

- (5) If you have not yet paid the yearly membership fee for 2015 and 2016, please do so at your earliest convenience. If you do not pay the fee for 2015, you will receive no shipment from JLTA and will not be able to use the “My Page” site after April 2017.

- (6) If you plan to leave JLTA, please let us know by sending a message to jlta-post@bunken.co.jp

JLTA Secretary General
Rie KOIZUMI (Juntendo University)
JLTA Vice Secretary General
Kazuhiko KATAGIRI (Senshu University)
Yuichiro YOKOUCHI (Hirotsuki University)

Makoto FUKAZAWA
(University of the Ryukyus)

<編集後記>

20 周年記念大会も無事に終わり、学会として大学入試改革への提言も出されることになった。外部試験導入の是非だけでなく、内部における3つの資質・能力の柱(知識・技能、思考力・判断力・表現力等、主体性・多様性・協働性等)による新しい観点別学習状況評価の方向性についても議論をする必要がある。新学習指導要領の実施に向けて、研究成果を還元し、学会として、また研究者個人としていかに社会への説明責任を果たすかが一層問われてくるだろう。(NN)

次のような原稿を募集しておりますのでどうぞお寄せください。1) 海外学会報告、2) 書評、3) 研究ノート、4) 意見、またその他当学会員の興味関心に沿うもの。



日本言語テスト学会事務局
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1
順天堂大学さくらキャンパス
小泉利恵研究室 TEL: 0476-98-1001(代表)
FAX: 0476-98-1011(代表)
e-mail: rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp
URL: <http://jlta.ac>

編集： 広報委員会
委員長 笠原究（北海道教育大旭川校）
副委員長 佐藤臨太郎（奈良教育大学）

委員
飯村英樹（熊本県立大学）
齋藤英敏（茨城大学）
長沼君主（東海大学）
宮崎啓（東海大学）